

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2019. 6



令和元年6月1日発行(毎月1回1日発行)第67巻第6号

No.733

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下してきた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇一九年六月号 (通卷七三三号)

◇今月の二十首詠……残り雪

中島義雄 2

■作品 **A**

八乙女由朗・山下雅子他 4

A 矢口さた他 20

B 山田珠美他 62

C 吉田明子他 76

A 佐川久光他 90

■オリープ集

植田和子・金澤敦子他 48

◇今月の二人

片倉ひろみ・今野勝江 16

香川進の生きものの歌 8

田土成彦 14

■『沖縄』という歌集

玉城 徹 38

忘れ得ぬ香川進 2 (本家・分家②)

椎名恒治 15

◆《特集》写真・歌合わせ

【責任編集】田土成彦 55

写真……木村文字

◇アンソロジー (夏帽子)

中村はるみ 46

私と短歌との出会い (202)

大倉美與子 19

■遊覧寄港 (万葉集との出会いと大和古道)

泉 嘉穂子 54

■歌壇月旦

「生きづらさと短歌」って

檜垣美保子 81

◇シルクロード・カフェ

(責任編集) 木村文字 60

■四月号作品批評

A……福田庸子・片岡邦子 82

梅本武義・上林節江

B……茂木 斌・深井喜久代

C……市原やよひ

オリープ集……浜谷久子

今月の二人・作品評

久我田鶴子 18

桃原邑子、平成のうた

45

——『桃原邑子歌集』二〇〇八年刊より——

最近の歌誌より

【編集部】 108

支社・グループ掲示板 (岡山支社)

中島義雄 107

神田通信……表3

(表紙デザイン) Tazuko Xuga

残り雪

中島 義雄

さよならも言はず訃報の一通を寄越して君は雪に消えしか

雪花を裳裾に舞はす道のうへ生きゐる者の足を急がす

歩く幅に雪掃かれたる道を来て忌中札貼られし玄関を訪ふ

「この歌は」とわれを諫めし彫り深き貌が白布の下に目瞑る

遣したるロイドの眼鏡磨かれて経机のうへに織き光もつ

差し出されし遺詠の文字の読み取れず読み取れぬまま黄昏となる

言ひ残す何かありけむ眉すこし翳らせて遺影が香煙を浴ぶ

もろともに昏き戦後の貧困に耐へて歌ひき香拵み焚く

昭和二年岡山生まれ。昭和十七年「橄欖」に入って作歌を始める。昭和二十二年「国民文学」に移り、昭和三十二年「地中海」入社。
歌集に「銀霜日記」「宵田風」「晩夏光」「砂丘幻聴」他がある。岡山支社長

ひたすらに写実を頼り詠み継ぎき七十年は師たり兄たり

雪のなかに腕組む君を頭たしめて「雪虫の舞ふ雪の黄昏」

靈柩車に従きゆく道に雲垂れて生死一如しちうじいちごよの雪虫が舞ふ

葬り果て夕冷えまさるなかにおもふ我も一代の過客に過ぎず

微かなる寒椿の朱滲ませて遠き記憶のうへに雪降る

為すべきを明日へ明日へと押しやりて降りて積もらぬ雪を見てゐる

長生きをせよとやさしく執られ来し手に暖かき家猫を抱く

春に聴き鳥らも醒めて聴きをらむ雪消の水の地に落つる音

淡雪の消えて鎮まる庭土を嗅ぎつつ猫が引つ掻きてゆく

春としもなければど明るむ窓ガラス尺取虫がゐる尺を取る

くらぐらと意識断たれしごとくにて春浅ければ迅き日暮ぞ

春浅き野に風荒るる夕べにて挽歌を綴る今日七七忌

作品 A

八乙女由朗

風ありて

・柴

横田敏子

「令和」

・福

ひるがえる木の葉のように風中の空を移動す一羽のガラス
 涯のある空とぞ知りて綿雲の東へ流れゆくを眺めつ
 さくら花咲くと言うのに風止まず染しもよ大勢人混むところ
 芽吹き初む木木に来たりている野鳥風に吹かれて時によろける
 山藁の麓あるくは老に入る好みか見えてほほえまじけれ
 へり三機宙をまわりて訓練すふと定年のかの日进行
 船岡城址根形のあたりへ落ちてゆく日輪ありて安堵は来たる

山下雅子

目覚め

・習

吉永惟昭

改元

・熊

気をとられあつという間の転倒に交る日常われに娘に
 「方形の空が見える」を諾えり病臥の耳になつかしき声
 安静期を経たる老体冬眠より今し目覚めむ季は春なり
 僕の手を思い切り蹴ってリハビリに午どし生まれの底力出よ
 アジアカップ決勝へのワンゴール深夜の病床にこおどりしたり
 樺つなぎよろめきながら礼をせるマラソン選手コース去りゆく
 ゆくりなく雨水の今日を音もなく降り出せり久々のおしめり

占うは時の流れか秘密裏の新元号を待つ平和ボケ
 平成の四月馬鹿の日「令」がきて皐月に和む万葉の風
 この令に和せば日の本いやさかと花誘うよな改憲風
 違和感はあると昭和の一桁が求めあぐねし散りきわ元号
 特攻の生き残りなる君が計に九段の桜開花告げいる
 暖冬というに開花のかく遅し肥後モッコスの洒落を地でゆく
 幾たびも侍りし韃靼天金栗氏細き目細し泛びくるなり

朝井恭子

平成

・森

大浪美雪

安美湖

・森

川の面に触れんばかりに枝さして平成最後の桜咲きおり
平成の最後のひとは休日なり公園の親子ボール蹴り合う
声に出し新元号を伝えたり平成に逝きし夫の遺影に
御社の杜に咲きいる山桜白きマッスとなりて静もる
手の甲にはほつほつ出でし小さき染みわが心根の汚れならんか
季過ぎしポインセチアの紅き苞色褪め新芽の緑鮮やく
残りいる時いくばくや新しき元号「令和」心に痛し

磯田ひさ子

山桜

・森

奥田陽子

春を待つ

・羊

陽の中にシートを広げ花の下飲んで語りて若きら躍る
前帯を垂らしし遊女も吉宗の飛鳥山に愛でしかさくら
忠度の詠みたる花か山桜しんと冷ゆみつみつと白
枝先にさみどりきさず大櫛くろがねの幹そらを押しあぐ
群れてこそ安けさのあり公園に子らの自転車ひとかたまりに
公園に昭和の色の残りをり赤きブランコ青き雲梯
かなしみをかなしみとして身に容るる力おとろふ　こでまり挽む

市原志郎

外食

・萬

小野雅子

青

・羊

久し振りに家族一緒に夕食を食へに出でたり冬風の中
夕食に車椅子にて出で来たり家族全員揃った日故
夕食を共に摂らむとした日なり孫全員が進学したる日
拾い来し花桃咲き始む孫と一緒に成長樂し
わが試歩路を横切りて行く紋白蝶ようやく春もたけなわとなる
ようやくテレビは野球を映し出し私の楽しみ一つはふえる
孫らそれぞれ入学式を控えて楽しき日なり今日日曜日

未公開の直筆書簡に手賀沼を嘉納治五郎「安美湖」と書きし
治五郎の旧家に拾いし椎の実をさやりつつ行くはけへの道を
世界一周最初のツアー参加者に白きドレスのおみなが三人
白樺派再現カレー包めるは丸番に白き割烹着のひと
幼見る沼よりつきつき老い人はクチボソという小さき魚あく
沼の辺に将棋さす人囲む人群にまじりて盤面のぞく
沼沖にいたる白鳥いつの間に餌をやる人の手よりついばむ

盛るごとくいちめん白き梅の花歟もつ人をちいさく置きて
自然林のこせる園のウォーキングふたりの背の少し老いつつ
もうお昼砂場に響くさよならは下枝の萌えにとどかん勢い
早咲きの桜くれない岸に照り車ゆるゆる通りにゆけり
みどり児はいつ生まれ来ん窓ちかく辛夷の蕾ほどけんとして
さくら花娘とみあげいし去年の春今ひた待てり生まれ来ん児を
曇り日の空にひらけるさくら花ささやきの声聞くごとく居る

若人の歩みは清し背を伸ばしススッとゆけり青葉の下を
見たばかりと思ふ番組めぐりきて一週間の早さに気づく
三角に描かれ三角形になる男雛女雛のやさしき姿
雨の日は花を閉ざしてクロッカス小人のやうに花壇に並ぶ
冷蔵庫の上の段にあつたゆゑと晩忘れられたる煮物
花冷えの夕べひとりて読みきたり青いリボンの葉をさがす
歩いても行きつけなかつた日の記憶　青空をゆく一つの機影

菊岡栄子

山辺の道

・漣

義兄の息子と従兄同士のわが息子仲睦まじきをやすらぎとする
 世間には従兄同士の結びつき浅きと聞けど我が家は深し
 お香の友と山辺の道歩きしを語り合えたりいと懐かし
 旧家なる夫の実家の通り庭抜けて友らと山辺の道へ
 高校の同級生のノンちゃんが柏汁持ちて見舞ってくれる
 少しずつ会話の出来る喜びを山辺の道の想い出にふける
 山辺と聞けば仲間を思い出す元気な頃の姦しきこと

菊地栄子

山鳩

・湾

難壇の人形の視線異なれば旅のころも定まり難し
 街中を巡らす堀の雪消水に人はたばしる際に沿いゆく
 足弱き姉を誘わずになりけり登る城址に紅梅は咲く
 ひさびさに歩く一万歩にくたびれぬ体調は明日へ続けと願う
 怠慢のごとき動作を意識する拭いきれない心細さに
 抗うはわれのみなりやストレッチ練習しつづ苦しき日のあり
 ボオーボオーと鳴きいる鳥は山鳩か、も一度聞きたし母の呼ぶ声

木村文子

中一殺害事件

・羊

ちーんちも唯も咲もダメだって。どうしよ帰る？帰りたいくない。
 あ、仔猫／笑顔ではしゃぐ十三歳。また家出しよ。うん今夜から。
 母さんは？おじさんが聞く帰んなよ、頷きついでにコーラ飲み干す
 (母さんは夜はシゴトで父さんはイルケドイナイ)だからいいんだ
 伸びきったカップ麺をつまみ上げかわりばんこに一本ずつ食む
 永遠の子供だってピーターパンいいね、そうかなねえどこへ行く？
 野宿する。二人でいれば大丈夫。(殺されるなんて思ってた)

草刈十郎

焚き火の輪

・世

歓声をあげ子ら廻す勝独楽の乱れぬ余力確かにありぬ
 折りたたみ椅子も持ち寄る焚き火の輪囲むはすべて老いばかりなり
 妻とわれ二人して住むただ広き昭和の家の寒さ身にしむ
 冬空の青さに行けば人のなき公園といふ寒さ厳しき
 稲柱八十路の音を踏みながら老いらの集ふ公民館へ
 日向ぼこしてゐる老いらと通りゆくわれと初音を分かち聞きたり
 水仙の香りと潮の香りする岬に行けば春近きかな

國井節子

わが身世に古る

・春

早春の古墳の森のざわめきて永き眠りに飽きたるは誰
 まんまんと水を湛ふる垂仁陵ポツンと小さき田道間守の塚
 万葉の歌垣の跡石榴市のここよりかかる山の辺の道
 天平の塔の水煙あたらしく薬師寺の塔に上る日近し
 十年の解体修理によみがへる薬師寺の塔かがやけ千年
 落日を追ふ雲のいろ緋せゆきて移りにけりなわが身世に古る
 明日もまた今日のつづきを生きたくて日日続けたり筋肉体操

小泉泰清

平穩にあれ

・う

人さまと競ふ気の無く日常の過ぎ行きひたすら平穩にあれ
 春日めく日射しにつつまれ整形の医院へ通ひ出す腰痛奇む
 糖尿がすすみ腎性貧血症とか食事療法中庶の味
 寝たきりの病者になるは堪らんか医師のおしへを頷きつつ聴く
 日のあたらぬ庭の木々にも青き芽が膨らみ春の輝きを待つ
 ベニカナメの垣根に赤き新芽立ち古き葉こえて照り初めにけり
 一隅を明るむ黄の花水仙のしほみうなだる桜みつる庭

河野 繁子

花旅

・雁

みちべりに雪割いちげ惜しみなく群れなし車の駆けてゆくなり
 十七歳年下なれど花好きの出会いたちまち糸のつながる
 距離おかず雪割いちげとコバイモの群落ありてかがまりて会う
 種おとし一つ葉はぐくみ群れをなすひそかな音の林の木陰
 花好きに採らるるなかれこばいもの子葉に落葉をかけてやりたし
 陽のさせば花のひらくと知りつくし昨日の下見きょう連れくるる
 まなうらに藍むらさきのゆれ留めやよい九日四時間の旅

小西 美智子

桜

・大

万葉講座ともに通いし三人^{みたり}逆き平成最後の彼岸近づく
 樹皮あつき桜老木その根元プローチつけしごとく花咲く
 年経れば樹木も生きをいそぐらしいきなり根元に花を咲かせて
 花袋うかべる川面ながめつつありし日の歌よみがえりきぬ
 呑川の歴史を記す碑に花百年のいのちも刻む
 でーばっばうふいに鳴きたす鳩の声雨がががりて日のさしくれば
 赤と青紅型模様の愛用の対のカップにコーヒー満たす

小林 能子

カワウソの里

・羊

カワウソを見たるとふ噂二度三度 日久尻川に春雷の後
 自転車君の家から学校まで聖神社^{かじじ}も寄り道の域
 村の鎮守子聖神社の神域は川も沼もありカワウソの里
 満月の葦辺に遊ぶカワウソよ捕らはれ売らるる運命と知らず
 郷郷の神社に享保の棟札の残れと哀れカワウソ絶滅す
 雨にぬれ欄干に立つ河童殿アキラちゃんとかワウソ見たら教へて
 墓参りみやげとなれば小麦色の「かわうそサブレ」二十枚を買ふ

近藤 栄昭

高尾山

・福

ハイカーは登山口駅に生き生きと流れと歩く途切れる間なく
 待つよりも歩くが早いと従業員乗せない営業ケーブルカーは
 前空けばすぐに割り込む高尾山足元見えずに傾斜増し行く
 一列の人ら下り来声高く通せ通せと市場の混雑
 参道とも山道ならぬ土産店人は列なす団子と土産と
 行も列も人で埋まりてクシヤクシヤにセッセと登る大丈夫か上は
 仏舍利を納める塔の静かなり高尾山中しずかなところ

近藤 芳仙

長崎(二)

・信

遠くきて平戸大橋わたりたり緑の離島は吉利支丹処刑の地
 今もなほ口伝に信仰つづくとふ雨の生月灯台小さし
 浦上の沈黙といふ重き言葉長崎の地の抱きつづくる
 禁教令にくるしみし後に被爆すと叫びは耳にこだましてくる
 対岸に今も動ける造船所 戦艦ムサシのひながたを置く
 西坂の二十六聖人のブロンズ像日本語の名もつらなりてをり
 テレビより「オラシヨ」唱ふる島人の声を聴きたりくぐもる声を

坂上 直美

夫不在

・天

君なくていかにこの世を渡るべきただ数日を逢わぬのみにも
 眠り浅く苦しき夢の浮かびくる覚めても君の傍らになし
 いずこにもすでにし春は来しものを君なき私の心には来ず
 梅は今盛りと聞けどいずこへも行けず心に思うのみなる
 「未亡人になる練習」と君は言う我先逝くと言いきかするに
 春よわが軒を過ぐるな憂きことの積もりて窓を見上げざるとも
 久々に聞く遠く住む君の声春やわらかに夜の更けゆく

坂出 裕子

沈丁花

・落

沈丁花かをり漂ふ庭に出で草抜きをするひとときの幸
 沈丁花夜もやさしく香りを雨戸閉めむとひらく窓辺に
 もうすこしここにゐたくて沈丁花匂ふ庭辺に草を抜きをり
 春が来て何の楽しみありといふわけにもあらで待ちをり春を
 ふり返りみることも多しとどり来し長きひと生の道の凹凸
 おなじことくり返しつつ過ぎてゆく残り日といふ大切な日か
 おぼろ月おぼろにかすむふうはりと春の気配の雲のあはひに

佐久間 晟

日乗(二二)

・湾

大正に生まれ昭和は泣きつづけ平成に漸く己れを取り戻しそして令和に逆くかわれは
 ほがらかに唯ほがらかに生きゆかん九十二歳を過ぎたる今は
 花は咲く誰に見せんと言うこともなく独り咲きつく思いのままに
 やがて夏、日は照り陰る空いっばい楽しみも悲しみも思うことなく
 何の木か空に向かいて花開きそしてやがては独り散りゆく
 過去なれど思うも寂し残りしもの何も無ければ何の生きかや
 しかし待て今しばらくの人生に何かは出来ん人の為われの爲にも

佐藤 道子

看取り

・甲

骨折の動けぬ夫を看取りるる親子三人の静かなる夜
 誰一人疲れて寝込むはゆるされず骨折の夫を見守れる日々
 咳一つ直ぐに寝息を見にゆける優しき子をも氣遣ひてをり
 カポックの新葉六枚手をひろげ冬陽集めて小さな花火
 天に向けすくと手合はず枇杷若葉夫の平癒を祈るがごとく
 アーモンド小さき蕾が今朝開き宇宙の春が庭に満ちくる
 十葉の小さきハートの葉をいくつ春を溜めぬし土が押し出す

椎名 恒治

落花

・橋

さくら散る林のけやき新芽あざやかなりリハビリ病棟の窓
 わが臥せる四月一日花は舞ふ改元決まる「令和」
 一夜いくたびサイレンの音老いを運びしか急の事故者か
 痛い痛いといふから痛いのだ若きナースにたしなめられつつ
 空は晴れ柳の林鮮しき芽吹の梢光りて揺るる
 見下ろせば九道の辻の信号は青となれば人動き出づ
 切れ切れの雲とどまれる空の青 四月三日よ検査の日

鈴木 結志

天平の宝物(四)

・福

唯一の高倉天皇消息とう生きてこの目に尊く拜す
 嵯峨天皇宸翰「光定戒牒」の書風雄渾見る目ひき込む
 奈良時代写経の中に類のなき聖武天皇の書王位ゆるがじ
 三行と三文草かな官廷の書流確立みかどを偲ぶ
 日蓮の怒濤のような意志を持つ書の迫力にこころひかれぬ
 温雅なる味わい深き寂蓮の書にみちびかれ目よりはぐくむ
 仁和寺の復興記録頭證の筆致尊くあらため見つむ

関根 榮子

雪占

・埼

雪形の現れる山をふと恋えり登山をとうにあきらめていて
 土地人は雪形をかつて雪占と呼びてその年の豊を占いし
 さくさくと残雪の踏み危うげに尾根道辿りし遠き日もあり
 猫はもう居なくなりたり春の夜にわずかに光る器の水はも
 会果てて三三・五五に帰り行く「ほら見て見て」と春の満月
 蜜吸うと椀に群れる鳥達の椋鳥が追う雀の小ささ
 下草のほのかに青き休耕田帰雁の群れがわらわらと発つ

着陸の三分前に義父は逝く初の男孫の間に合わせざりき
われもまた義母危篤の報豪州に受けしよ四半世紀前よみがえる
このたびは術後の身なり外泊の許可得て喪主の妻とし並ぶ
肝心なとき役立たぬ長男の嫁なるわれの為すべきは何
わが夫の最後の授業を見届けてその日に入院三日後に逝く
昭和二年生まれの義父は平成とともに去りゆく大往生なり
十二年ぶりの桜を見せたる義父なりき今宵子の機は南へ飛び立つ

高尾恭子

遊君阿古屋

驚娘もう踊れぬと言いしより玉三郎が透明になる
身ごもれる遊君阿古屋は凜として向い蝶とぶ打掛ひかる
白塗りの裡にあまたの貌を消す一世一代の琴貫ならん
花道をくだる素足のしろじろと遊女の一念神さびにけり
大舞台おえし遊女の玉三郎素足の爪はかなしかりけり
春ちかき鴨川べりの芝居小屋あおき非常の扉をとざす
南座の天井棧敷に老神が棲んでいらしあるいは怪人

高津砂千子

形見

ふうわりと形見のスカーフ袷元にああ出かけよう新年歌会
「ヤッホー」と手をあげ姉の店に寄るが歌会帰りの常でありにき
ふと姉の声を聞きたくなる真昼 外の面はましろ雪の降り積む
さみしさが紛れるだろうと子がくれし毛糸編みゆく冬ごもる日に
蓋を取りラップ剥かせばほんのりと立ちのぼる香よ手造りの味噌
わが造りし味噌まっ先に味噌わってほしき姉はも天上の花
七人のうからの中で孤独とう躰抱きしま姉は逝きたり

滝田靖子

回転焼き

ふつくらと白きその手に乗せられてお釣りの十円びかびかして
「今日の十日までです」唐突に言ふああこのほかほかの回転焼きね
四千元の黒いコートにひと冬を過ごしてしまふ雪降らないから
あれここにこんなケーキ屋出来たんだ震災後の町まだまだ変はる
仕事場の気配の残りある髪を洗ふ執拗に否ぞんざいに
ぞんざいに洗ひし髪を乾かしぬ身体に罪のあらざるものを
ただ息を吸って吐いてる日常が粗末なわたしを作り上げてゆく

竹下妙子

春愁

白菜を二つに割りて干しをれば芯の黄の色光を放つ
雨降れば太る「なば」ぞと持ちくるる友の笑顔に陽ざしこぼるる（なば 椎茸）
幾年を生きつきて来し桜木の氷雨を浴みてひそけかりけり
散るきは危ふさも見き夜ざくらの花の盛りの下くぐり来て
ふるへつつ危なげに花咲き満ちて風立つ日の終のはげしさ
心かく燃えたる事のありしかと見てをり闇に立ち上がる野火
夜の更けてのど過ぐる水思ひ出づ言ひさして君の呑みたる言葉

田土成彦

弧

かしぎつつ成層圏に登りゆく機体片面のみをひからせ
上昇気流捉へし翼は弧を描き昇りつめ行く点となるまで
銀竜草と銀竜草もどきと春秋に時違へ咲く分け合ふやうに
啼く声のさまざまあればカラス語の会話にケフハテンキガイイネ
今日はゴミ収集日だよ生存の餌をあさりくるカラスも懸命
春落ち葉積もる路傍にながしかかおもむきありぬ踏みて歩めば
令の字義あらためて知るさう言へば令嬢といふ言葉もあつた

田土才恵

城北公園通駅

・宙

中島央子

泰山木

・森

住民の期待を駅の名に込めて今走りゆく六両電車
アボカドのカラーに鉄橋ゆく電車かつて人道板橋のあと
噂のみ流れて久しき貨物線この春晴れて客車が通る
新路線走る電車を夢見つつか来しかたはやも八十年余
雨蛙色した電車六両の今日も走るよわが町掠め
利便性上がりしことのうれしさよ小さき旅を夢見るいく日
かつてここに蒸気機関車走りたりわが嫁き来し五十年前

玉井綾子

記憶の付箋

・羊

中島義雄

元号

・岡

蒸す車内遅れる電車連絡する先も分かれ異動の初日
近頃の波うつ脈にのまれしか異動初日に止まる腕時計
十二階研修室のガラス窓 色付く御苑を片手で覆う
高層より見ゆる御苑の薄紅はさくら通りの記憶の付箋
送別会・歓迎会とも雨になりすほめし傘は水たまり生む
異動して降りなくなりし駅名は失恋後に聞く彼の名の味
人事異動の不可逆性の沁みる春、小三の子は初クラス替え

虎谷信子

年号

・伴

永塚節子

六番館

・銀

新たなる年号きまる「令和」とぞ。万葉集を ふたたび 読まな
何とまあ 四つの世代を生きてこし。友よ語らふ 青春かへれ
病室の更けゆく夜は 物音が、すべて白きに 吸はれゆくなり
今日初めて ウグヒスの声ききしとて、ナースは吾に、笑顔を見せる
高校生で 逝きし長子を偲びをり。甲子園球児の さはやかさよし
若きらを観つつ思へり。高校生で 逝きたる長子 殊更哀し
病床に賜ひし 学友の折鶴に、ほろり涙の 長子たちくる

寺庭を大づかみして根を張れる泰山木の辺に井戸水を汲む
足はこぶ人をらぬ墓多くなりビルの狭間にたましひ沈みぬ
六地藏を背に腰下ろす墓守の老いに今年も見送られつつ
ふみ入るる折はなからんあたらしき国立競技場を見上げつつ過ぐ
北の丸・赤坂トンネル過ぎゆく千鳥ヶ淵の桜いまだし
隣り家も角を曲るとこの家も人住まぬ家春の陽は差す
いつの間に空き地となりたる片隅に花垂あはく星形かかぐ

新しき元号の空に雲雀揚がり地に花充ちぬ生きねばならぬ
「令和」「令和」呟きながら駈け帰る学童ら常の挨拶をせす
匆忙と成りたるごとき元号に天平の世のひびきを拾ふ
今日今日と喘ぎし昭和平成の世紀が遠く煙霞にかすむ
散る花に身を任せたる千万の血潮の上に継がむ平和ぞ
新しき年号を背負ふ乙女らが「殞後の香」を花に集ひぬ
享年となるべき年号定まりぬ平成に逝きし妻を隔てて

椅子の数は二十一脚テーブルは六個ばかりのカフェ六番館
いつしかにわが座る椅子定まりて常連客の一人に認知
名は知らず所も聞かずコーヒーを飲み集う私も一人
このカフェ一人暮しの寄る所だれもかれも語らいやまず
おおかたは女性ばかりの客に混じりコーヒー一杯黙し飲む人
あれこれと足したり引いたりメニューあれど常連客の注文うるさし
その訳は午後のコーヒーししまったと思えど遅い輾転反転

白子れい

野のみち

・洛

背の丈に伸びし穂芒ゆらゆらと白き波うつ吹きくる風に
 葉も花も散りし臘梅大空に絵を画くごとく枝をおよがす
 葉の散りし楓の小枝に白き花宿すと見しは翠のひかり
 この冬のいつしか過ぎてあたたかき日射しに庭の明るくなりたり
 雪柳・馬酔木に椿・木蓮のそれぞれ白競う野のみち
 明け早くなりて鶯ケキョケキョと迎えくるるに歩みのはずむ
 新しきさみどりの芽の出ずる道われにも芽吹け新たなる理想

ばばりようこ

いかに在すか

・鹿

弥生とう月になりたれば殊更に君をし想う いかに在すか？
 かつて我を訪いし折りのおもてなし桜島一周の実行をなせり
 山歩き得意の達人なればこそとっておきのごちそうならんと
 火の島の巡りにきみは勇みたち片やこのわれ氣息奄々
 地を這うがごとの歩きに通りがかりのバス見かねてか「乗りませんか」と
 知らん顔してやよいさん先にゆき止むなく謝辞し十時間余を踏破
 弥生さん覚えていますか二人共若かった故のくさぐさの冒険

浜谷久子

食堂

・地

白木蓮の固く閉じゆく寒もどりの春の逡巡ときを狂わす
 春彼岸黄の水仙の咲きころを大きな東に華やく墓参
 おもむろに花びら開く白木蓮蕊ふとぶとと春陽をもとめる
 身に計る日の暖かさ土筆んほ根株の縦横あまたの芽粒
 弥生なかば土筆に今日の暖かさここにもそこにもトンガリ帽子
 蓬など摘んで友待つ「食堂」は果たせなかつた若き日の夢
 来ることのできない一人の友を待つ血液製剤薬害を負う

浜本英美

柿の味

・夢

白き帽子白き靴下の小学生街路をながながと何処までゆく
 或いは番の州公園めざしゆく児童らの列か背空高し
 珍しき「甲州百目」の柿の味がた形を越えて味よし
 骨密度基準値半分と傍らにて聞きくれしがチーズの届く
 わが内に墓標をたててひと偲びわれの墓標は誰が内にたつ
 外は雨ひとり留守居のテレビの前なぜか演歌の心にしみる
 ひとつの季産みだす自然の苦しみか窓打ちつづく春の嵐の

檜垣美保子

風

・昴

赤き橋わたればやがてたどりつく山頂に赤き橋見えざりき
 花見んともとめきたりて花のなく春の落葉の音かけくだる
 文旦の実を供えたるくらがりて遠きもの近く近くて遠し
 梅檀の切り株に日のあたる午後たむけられたる白き花束
 こきざみに花びらふるえ五分咲きの桜並木の枝ゆれており
 風の谷さくらの谷にうぐいすのこえ曳きながら遠ざかりゆく
 松の木の高き一本立ち枯れて先端に一羽くろき鳥かけ

福田庸子

冬の命

・今

雪の量はるかに減らす遠山を仰ぐ朝空乾きつづけり
 安らげる背見せ啄む鶴の冬の命を預かる我は
 南を向きてとどまる鶴と冬をやすらぐひとときとせむ
 茹で刻み菠薐草の赤き根の甘さを愛でし遠き日の義姉
 己が基に雪を被らせなめらかに午後の日を受く如月の嶺
 インハウンドの無礼糾せず政権は物乞ひの国へと突き進むのか
 財政破綻すでに達せるこの国はいづれギリシヤと同じくなりぬ

藤田美智子

〈而今〉

・新

帰りにゆくところをもてる鳥たちが阿武隈川を飛び立ちてゆく
見逃さぬ魚もあらむ振り下ろす一瞬釣り糸に走る光を
春の気配に土も昂ぶるならむ朝の畑に湯気立ち上る
君に優しくできぬわが身を何処に置く白木蓮は闇に浮かべり
胃の奥にこころ固まりある夜なり理由はきつとひとつではない
「いい人芝居やめろ」と言ふを諾はむ今宵の酒は〈而今〉と決めて
じやくちゆうと騒がれる前の若沖に会ひたかりけり「象図」に向かふ

藤森 巳行

盆栽村

・銀

ため息が思はず口をついて出る一億円の盆栽の前
年収の五十倍なり一億円盆栽見る我年金生活
ひと鉢に広がる自然の景観を感じる事が魅力の盆栽
枯れてゐる真柏の幹を舍利と言ふ骨を晒して枝引き立てる
「リュックサック前にしてね」と外つ国の盆栽師より注意を受ける
私にも買へる盆栽英選は一万五千円プラス税なり
生き続け一千年の蝦夷松は國後島より採られし盆栽

船田 清子

白き饗宴

・天

赤き椿・白き雪柳の花散も巷に見えず吹きぬくる風
昨年の酷暑のゆゑかこの春を香さへも立てぬ梅・沈丁花
まなかひにあまた灯火かがやかすこぶしの蕾の白き饗宴
彼岸過ぎ今日か今日かと待ちまつに桜の蕾みどりを解かず
時にのまれ消えなむ息の裝飾古墳相次ぐ災害いかに堪ふるや
放射能汚染最たる双葉町清戸迫古墳を案じて八歳
君が歌集の表紙飾りし清戸迫壁画のひび割れきびしとニュース

牧 雄彦

きさらぎ

・大

ラオスよりわれの帰るを待ちぬしか帰国翌朝逝きし兄はも
長かりし入院ののち逝きし兄きさらぎの朝白く明けゆく
姉逝きてふた月兄もあとを追ふ春なほとほききさらぎの朝
献体をと遺言ありてなきがらは大学の車で運ばれゆけり
献体し運ばれゆきし兄なれば通夜も葬儀もなく時が過ぐ
角膜をいただきますとと大学より知らせありけり兄は足らはむ
兄逝きし朝のひかりにわが庭の沈丁花やに蕾ふくらむ

松浦 禎子

フィレンツェ

・羊

ユダヤの王若きダヴィデはフィレンツェのシンボルとして聳え立つなり
紀元前のユダヤ王とぞダヴィデ像美身は一步踏みいださぬか
ダ・ヴィンチの絵画の部屋にその白眉青衣のマリア衣のふくよかに
はるかローマに少年使節送りたる安土桃山の時代 夢幻に
メデイチ大公に迎えられたる少年団四百年はにわかになく
メデイチ家の一族奉ずる聖堂になに祈りしか天正少年
メデイチ家の礼拝堂のその地下に老コジモねむるも物語めく

松永 智子

影

・嵐

はなやぐは夢のなかなる春の空かなしむいとまあらずして消ゆ
月の照る道に音絶えふりむかずひとりゆきまたひとりゆくかけ
川土手のみどりあたらし踏みゆくに音のなくして草の香のたつ
十七夜の月のおかるしひとり影あははと行くを見て立つ
春のおとすでにしとほしさりながら風みどりなり川の辺の道
川土手に風のあるらし柳の木ゆれやすくして華やぐあかとき
ふりむくにうごくものなし風の落ち楠の一木みどりあたらし

この人は私のことも言ふならむ他人の悪口を聞きつつ思ふ
 恭しく開花宣言セレモニーシャッター一斉ああ平和なり
 既に我は魚を通じて体内にプラスチックをあまた入れたり
 超音波の蝙蝠の声聞こえくる超能力者の春の夕暮
 さびれる商店街にも目立ちある「平成最後の売り出し中」は
 ちちははも見てゐるならむ散り初むる彼岸と此岸の隙間のさくら
 信じられる者と映るか近寄りて来る幼子の「迷子になりました」

宮本靖彦

父

・俊

焼跡に子育てのみを染しみし明治の父は旅せず逝きし
 夕飯をともに食ふるを慣ひとし父は我等の話を聴きし
 浴はぬ吾に父は優しさ全うし 子への我目は五分咲き桜
 大人として我を認めてくれし父子への思ひに迷ひなかりしか
 六十五年前の吾なり北浜ゆ天満橋に飛ばす少年
 昔父「ラ、ラ、ラ」と唄ひし「春の唄」我等ホームの慰問に演ず
 雛壇のよこに箱びな父母の贈りくれたる昭和の半ばに

三好聖三

折節の

・伊

天城嶺へ登る経路の水枯れて嫩の苔も乾きいるなり
 たらの芽が採りごろですと桜花風にのりつつなげなく言う
 苔のむす山毛櫛の倒れ木見つめつつベットポトルの水を飲むなり
 草々が勢う五月畑なかに鎌持つ母がたおやかに立つ
 けだものの糞をよけつつ飯を食う八丁池のほとりの草ふ
 腐りゆく猫の身体を持ち上げてあらたに土へ埋める閑かに
 河津町の奥へ奥へとわさび田のほとりに魚の泳ぐをみたり

御代田澄江

春風

・茨

仏壇に香手向くれば人型の御幣風無きにかさりと動く
 還り来し亡夫にやあらむ眼前を動きし御幣にお早うございます
 海洋汚染避くる手立てとならば良しマイバッグ持つを慣ひとなしぬ
 郵便受に警告チラシ留守電にも警告入りりを特殊詐欺警察懇切にして
 胸張りて歩まんものを継ぎ接ぎの舗装路俯きて歩むほかなし
 千柿の出来具合鶴に教へられ鳥につつかれ初めて込みぬ
 春風にもみしだかるる白蓮の咲き残る見ゆ強く生くべし

茂木

斌

ホンダF1

・埴

バルセロナにF1テスト始まりてホンダにわれの期待高まる
 当面の敵はフェラーリ・メルセデスPUマシンとも互角なり
 予選にてポールポジション取れたなら優勝の目もきつとあるべし
 やりましたレッドブルホンダ初戦にてフェルスタッペン フェラーリを抜く
 煩惱を消すとふ高尾山の男坂百八段に踊り場二つ
 去る冬よお前のありて咲く桜なれど惜冬と言へずごめんよ
 ご主人の持病四つと聞くからになんぼ辛さか茂木静子さん
 もとむらしげと 早春の雨

・そ

華やきも愁いも春とともに来る子の嫁きゆく二月となりて
 降りてより手を翳しゆく人のあり春のひかりの雨ふりだして
 決断をせぬ日々つつき春の雨しずかにみどりの屋根をうつ音
 嫁ぐ子の部屋にのこりし文庫本われの部屋より移りいし本も
 嫁きたる一人の不在ひとひらの落ち葉の重みほどの寂しさ
 帰る来る者なき夕暮れいつしかに二人の夕食早くなりきに
 半世紀前なる歌をながしつ妻は寝入りぬ宵のうちなるに

久我田鶴子

エイプリルフール

・羊

本島に米軍上陸かの年の四月一日嘘にはならず

沖繩へ飛び立つ日本の特攻機が子を殺めしは嘘にはあらず

沖繩を出て台湾に暮らす日々六年邑子のうたを知らざる

愛を得て子を得て足をわらくせし身をふるひけむ生きむがために

忘るはずのなき子の命日エイプリルフールに重ね母なる邑子

戦争も子の死も嘘になし得ぬをエイプリルフールに刻みし邑子

琉谷の潮の満ち干によみがへれ詩人思石を恋ふのみの体

桃原邑子は、こう歌った。〈アメリカの船艇に砂浜の見えぬなり昭和二十年四月一日〉。

新元号「令和」が発表された「四月一日」は、沖繩県民が決して忘れることができない米艦隊（その兵力は二〇八、七五〇人）沖繩本島上陸の日であったのだ。

このような書き出しで、福島泰樹氏が角川「短歌」五月号の歌壇時評で桃原邑子歌集「沖繩〈新装版〉」について、ほぼ三ページにわたって書いている。そのタイトルは、「文学的イマジネーションは時に……」。

終わりに近く、遺歌集「桃原 沖繩Ⅱ」から新装版に収録した四七五首をつぶさに読んだ驚きを語り、その文体の変容について言い及んでいるところも見逃せない。是非、一読を。

香川進の生きものの歌

8

田土 成彦

・においなき蚕がひかりを食うときのしずしずとして上げている頭。
『木曾川』より

絹は戦前では日本の主要産物であり、例えば、バラシユートの製造にはなくてはならないものとされてきたらしい。ところが先の大戦によりアメリカへの輸出が停まったため、絹に変わる人造繊維の研究が急遽進み、ナイロンの発明に至ったという。さて蚕は完全変態で卵→幼虫→蛹→成虫と変わるが、幼虫は数回の脱皮の後に蛹に変身する。この終齢幼虫はもう桑の葉を食わずひたすら変態の時を待つべく頭を上げて絹を吐き出すのだという。もちろん筆者はその実情を知らない。蚕にかかわらずこの形態の生きものは最も苦手なところだけれど、この歌の作られた昭和三〇年代ではまだ農村部にゆけば目にする機会も多くあったのだろう。蚕特有の匂いも無くなり、桑をかじる音も無くなり、静謐の中で変身を遂げていく瞬間が捉えられている。話は変わって大原美術館にはエル・グレコの受胎告知が所蔵されている。天使ガブリエルに告知されたマリアの表情がとても印象的だ。何かこの歌を読むたびに、このマリアの表情と蚕の姿が重なってしまう。いのちの切羽詰まった澄み切った瞬間の表情なのだ。何と蒙昧なたとえたと叱られるかも知れないが、生きものたちにはこのような崇高で威厳に満ちた瞬間があるのだ。それを気に止めるかどうかが問題なのだろうと思う。

本家・分家 ②

椎名 恒治

昭和五十七年一月二十一日、「詩歌」の長老西村哲也が亡くなった。一月二十三日、午後七時より東村山市富士見町の西村邸にて通夜。同町一丁目に住む小生は香川進に同行、西村邸に参上した。西村邸の勝手知ったる香川進は、裏庭の木戸を開けて入り、いきなり縁から上がり棺の後ろに回り「手帳は？」と物色。手帳マニアの香川。「座敷の方へどうぞ」と案内の係が促す。「本家の主人が呼ばないのに座れますか」と動かない。「本家の主人」、つまり「詩歌」主宰前田透先生は葬儀の準備作業中で、進先生には見向きもしない。進先生は廊下に立ったまま――。小生は末席に座る。透先生、やがて立ち上がり「明日の準備があるので、お先に」と小生の耳元に小声でひとこと、帰ってしまった。あとは数氏と香川進先生の宴会になってしまった。飲むことすまじかった。

さて、今は亡き「詩歌」の長老西村哲也氏をご存じの方は少なくなつたであろう。小生はその頃「地中海」の編集をしつつ、多摩歌話会の会員であったので、西村氏の追悼記事など書いたりした記憶がある。いすれにしても、あのお通夜での香川進の酔態はすまじかった。

『香川進全集』に香川進未刊歌集『構築』が収録されており、ややこしい解説がついている。数氏の香川批判のとききな

か、西村哲也の批評も載っている。(香川・小関・西村三氏が「前田家寄寓時代」でもあり、ややこしい。) 歳月は流れた。あらためて、熟読したいものだ。

最近、西村邸のあととおほしきあたりを歩いたが、思い出のよすがは何も見当たらなかった。

【寄り道】

椎名さんがここに書かれている「構築」の解説というのは、「あとがき」のこと。戦後まもなく上京した香川進は、奥秩父に疎開帰郷して留守だった白目社、前田夕暮宅に小関茂・西村哲也とともに寓居し、焼け出されて近くの空き家に転居してきていた矢代東村と四人で「詩歌」の復刊や戦後の短歌について日夜話し合った時期があった。その頃、「構築」の素稿を彼らに提示し、批判を乞うたところ、西村哲也だけは正面からぶつかってきて、香川の天皇讚美をたたきのめした、とある。昭和天皇に対する思いがそのあとに続くが、これを香川が書いたのは平成元年八月三日、昭和天皇崩御の後のことであった。

最近出版された外塚喬著『実録・現代短歌史 現代短歌を評論する会』の中に、「詩歌」廃刊のいきさつについて角宮悦子が書いた文があった。

昭和五十九年「詩歌」三月号の第一ページには、前田透遺言、一部写しとして次のような一文がかかげられております。「雑誌『詩歌』は前田透追悼号を発行した後廃刊する。昭和五十七年六月十五日 前田 透」

前田夕暮没後「詩歌」を継いだ前田透は、昭和五十九年一月、輪稿によって急逝。その遺言どおりに「詩歌」は廃刊された。(久我)

今月の二人

家族

片倉ひろみ

セピア色の写真に残る母とわれ優しい顔して引き出しの中の半袖の水玉模様もうる覚えおすまし顔の母との写真

よく見れば写真の母とよく似ており紛れもなくして繋がる血筋黒ぐろと艶増す薬缶実家まかにあり兄のこだわりのお茶を戴く下校時をとうに過ぎても帰らぬ孫居残り勉強とあっけらかんと居残りの孫帰り来てほっとする張りつめた心は次第に解けゆく

最近の子育てに思う虐待の騷さわという名に隠れた暴力を

たえまなく半ドア伝える冷蔵庫忙しいわれの夕餉の支度

震災から八年経つは瞬く間心が痛む倒れし墓石

震災から八年過ぎた春彼岸事情あるらし隣り家の墓

いつの間にか防災備蓄も数が減り大震災より八年を経て如月の突然の温さは十五度とか春風さやぎ身体にやさし

如月の季節外れの春の風一夜明ければまたまた寒し

日 日

「今月の二人」にとのお話を頂き、身の引き締まる思いが致しました。改めて短歌を始めたのはいつだったろうとノートを繰り、もう十四年も経った事に気付いた次第です。その頃の歌が

・羽を揺らしご飯をせがむ小雀よ甘えることは絵本の世界

先生の添削もあり、雀の歌が出来ました。先生は褒め上手で、これは私の短歌の始まりです。この歌が佐久間巖先生との最初の出会いとなり、今も続いております。先生は常にメモ帳を持ち、眼に触れたもの、心に感じた事をこまめにメモを取る癖をつけることと、心の揺れを書きとめる癖をつけよと教えて下さいました。平常のほんのわずかな心の揺れが短歌を作るためには大切なものであり、又、辞書を引く事の大切さも教えて下さいました。

私は二十八年前に夫を亡くし、今は娘夫婦らと暮らしております。ある時、捜し物をしていたら、引き出しの奥から若い頃の母の写真を見付け出しました。いつここに入れたか記憶ありません。ただ若かりし頃の母に出会ったことが嬉しくて、いつか母の歌を沢山作りたいと思っております。

今月の二人

春を待つ

今野 勝江

節分の日暮れを待ちて独り居も習いの豆撒き声をあげたる
寒き日は清しく香る金柑をこまごま刻み厨に充たす
金柑の種の多きを除きつつ煮つめるジャムのとろみが嬉し
屋根よりも高く枝張る檜の木を刈り込む庭師の意気込み強し
幹太く家守り来し檜一木角刈りに仕上げ新築を待つ
幼き日鍋持ち行きし豆腐屋にいま三代目の若き声して
縁側に父の床屋の懐かしく前髪少し斜めになりし
夕映えは燃えて秩父の山脈をぐんとひきよせ暮れゆかんとす
嘴に束子啣くわえて飛ぶカラス強風注意報の出されし朝に
乾きたる畑に出にけり浅き春を土の香決さくる鍬は光りて
鍬入れに力こめれば畑土の固さが腕に慣れぬ一日よ
大地震に降る星屑のまたたきは帰宅困難者の光りとなりぬ
大いなる満天の星ごとく光りめぐりて大地震の夜

ふりかえれば

「紙と鉛筆があれば短歌は作れるのよ」と故高原益枝さんに薦められ、お仲間と共に東籬男（塚崎進）先生の許に伺ったのが始まりです。先生は二十七年間という長い間熱心に明るく大きな声で会を盛りあげ、今市から大宮までご指導に通って下さいました。そのことは今も感謝の気持ちでいっぱいです。平凡な一主婦のくらしの中の歌を褒め、励まし導いて頂いたことが今日まで私が歌を続けられる源だっと思っております。また会でこの一緒のお仲間を支えられ、切磋琢磨できたことも大変有難いことでした。現在は福田（塚崎）庸子先生にご指導頂き、一首一首にお気持ちを送らせて下さる歌会は私には嬉しい時間です。

まもなく平成の時代も終わり、新しい元号の時代がやってきます。平成の時代はいろいろな災害が多かったように思います。また私達の生活も日々便利に大変化してきていますが、いまだ田畑が残り、遙かに望む富士山から続く秩父連山の山々に抱かれる故郷に私は住んでいます。平凡であるけれどもこの景色に心を和ませ、力を貰って、地に足をつけた短歌をこれからも作り続けていきたいと思います。

◆今月の二人・片倉ひろみ作品評◆
黒ぐるろと艶増す薬缶

片倉さんは仙台市在住。「家族」と題された一連は、引き出しから出てきた古い写真の歌からはじまる。

- ・半袖に水玉模様もつる覚えおすまし顔の母との写真
幾つ頃の写真なのだろう。半袖に水玉模様の服を着ておすまし顔の「わたし」。その時の細かいことは覚えていなくても、お母さんと並んで写真を撮ってもらった時の気持ちは、「おすまし顔」の自分を目にして蘇ってきたのではないだろうか。
- ・黒ぐるろと艶増す薬缶実家にあり兄のこだわりのお茶を戴く
黒々とした実家の薬缶。いかにも使い込んだそれは、作者にも馴染みのもので、家族の思い出につながる懐かしいものもあるにちがいない。その薬缶から兄が淹れてくれたお茶を戴く。「兄のこだわりのお茶」であれば、兄の気持ちまでも有難く戴いたことだろう。
- ・たえまなく半ドア伝える冷蔵庫忙しいわれの夕餼の支度
冷蔵庫から材料を取り出しては、次々と料理を作る。その忙しさに冷蔵庫のドアは閉まりきらず、冷蔵庫は注意を促す音を絶え間なく発している。台所は冷蔵庫と「わたし」との戦場と化しているようだ。
- ・震災から八年経つは瞬く間心が痛む倒れし墓石
東日本大震災から八年。上の句は仙台に暮らす作者の実感。下の句は、八年経っても倒れたままの墓石に心が痛むということが言いたいのだろう。次に続いている歌を見ると、それはどうやら隣家の墓石のようである。だとしたら「隣家の墓石倒れしままに」ではどうかと思うが、どうだろう。

◆今月の二人・今野勝江作品評◆
東子啣くわえて飛ぶカラス

評者・久我田鶴子

今野さんは、埼玉県の桶川市在住。一連は、春を待つ日々が詠われている。

- ・金柑の種の多きを除きつつ煮つめるジャムのとろみが嬉し
春を待ちつつ、金柑のジャムを作っている。「種の多きを除きつつ」の具体がいい。単純に煮つめるだけでは金柑のジャムはできない。手間がかかるだけに、とろみが出るまでになったときの嬉しさは一入だろう。いい香りも漂ってくるようだ。
- ・幼き日鍋持ち行きし豆腐屋にいま三代目の若き声して
幼い頃には鍋を持参で買いに行った豆腐屋。時代の変化とともに廃業に追い込まれる豆腐屋も多いなかで、この豆腐屋は若い三代目が継いでいる。それを知った作者の喜びが伝わってくるようだ。今はもう、鍋を持参で買いに行くことはなくなっただろうけれど、近くにこういう豆腐屋のあるのは良いものだ。結句は、「若き声する」とおさめた方がいいのでは。
- ・夕映えは燃えて秩父の山脈をぐんとひきよせ暮れゆかんとす
「夕映え」を主語にして、「秩父の山脈をぐんとひきよせ」としたところ、力強い。シルエットとなった秩父の山脈の色と、その背後にひろがる夕映えの色。スケールの大きな夕景に、明日も頑張ろうという気にもさせてもらえそうだ。
- ・嘴くわに東子啣くわえて飛ぶカラス強風注意報の出されし朝に
東子をくわえて飛ぶ鴉なんて！なんでよりにもよって東子なんだ？しかも、強風注意報の出された朝に？作者の頭に浮かんだ感嘆符や疑問符が目に見えるようで、思わず笑ってしまいました。なんででしょうか、この面白さは。

女学校途中で、「学徒動員」となって軍需工場に駆り出され、終戦の混乱の中で学業もそこそこ女学校最後の卒業生となり、新しい道に進み始めた時期に、島田玲子さんに短歌へのお誘いを頂き「新月会」の先生を紹介されました。初めて島田さんに連れられて、後藤虚堂先生のお宅「白人荘」へお伺いしたのが、昭和二十六年（一九五一年）十一月でした。先生御夫妻にお目にかかり、堂々たる古武士の風格の先生に畏れを感じながら、どこか魅かれるお優しさ、そして何より奥様（泉百合子先生）のほっこりと包み込まれる様な温かいお人柄に、がちがちに緊張していた心身が解され、是非入会させて頂きたいとお願いました。それから、先生の御予定の許す限りの訪問指導となりましたが、熱心な会員が目白押しで、早くて半月先、往々にして一ヶ月先の日割を頂き、短歌に無縁であった私に、厳しい御指導を頂きました。「深更に及ぶ六時間、八時間、休み無しで、「新月」誌へ発表の皆さんの歌を中心に、「真実は常に新しい」「上達の最短距離は多作」「有り餘の自分を見つめる」等、実作を通しての御指導。そして、常に万葉集、古今集、新古今集を読むこと、歌書、歌集、時には句集も話題となり、私の書架の本も増えていきました。良き友にも恵まれ、常に触発

され、一夜百首を遂げた事も、今では懐かしい思い出となりました。また先生は何より厳しく「文字を間違えないこと」「美しい字より正しい字を」「常に辞書を側に置き」「三度同じ間違いをしたら破門」と言い渡されました。吟行に、歌会にと参加させて頂き、先輩達の激論に恐れをなしながら一言も聞き逃さじと懸命でした。虚堂先生の御逝去により「新月」誌は昭和四十三



年十一月をもつて終巻となりました。短歌は作り続けながらも、発表することなく過ごしていたとき、親友の那須やよびさんからお誘いがあり、昭和五十一年十月（一九七六年）国民文学の生咲義郎先生を紹介され「流域」に入会させて頂きました。私は既に結婚して子供も居り、主人の転

勤で転居が続き、「流域」では、遂に吟行にも、歌会にも一度も出席出来ませんでした。岡山の実家に帰省した折、先生の御都合の良い時、友と一緒に先生のお宅を二度三度と訪問させて頂きました。ぼつり、ぼつりとお話しになることが皆歌に繋がって、楽しくも心ひきまされる時間でした。以来、東京と岡山の間を電話を通じて御指導を仰ぎました。時には厳しく、歌稿をそのまま返却され、「推敲は大切な作歌の修練の原点である。もう一度自分で推敲して投稿し直す様に」とお叱りを受けたこともありました。

生咲先生の「流域」も平成九年十一月に終巻となりました。

其の後、ご縁あって「地中海」岡山支社に入会させて頂き、支社長の中島義雄先生に、お優しくも厳しい御指導を頂いて居ります。地中海全国大会が有馬温泉で行われた時、初めて出席させて頂き、その日の熱気、感激は今も忘れられません。

長年の間の心弛みと加齢により、誤字、脱字を繰り返して、都度中島先生のお手を煩わし、反省しながら投稿させて頂いて居ります。「歌は私の人生の記録」と最期まで続けたいと思っています。

どうぞこれからも御指導賜りますようお願い申し上げます。